脳機能とリハビリテーション研究会　2011 年研修会　抄録

【講演】　「園芸活動が有するリハビリテーションとしての可能性」

野田 勝二　（千葉大学 環境健康フィールド科学センター）

我々は 2009 年度より A リハビリテーション施設にて、利用者への具体的効果を目指した高次脳機能障害を持った方に対する自立と社会経済活動復帰のための園芸活動プログラム（ガーデニングプログラム）を実施しています。ガーデニングプログラムは週に 1 回 2 時間行っています。今年度で 3 年目に突入し、ようやく園芸活動の特徴やプログラムの組み方等について少しずつアウトプットを出せる状態になってきました。今回は、このガーデニングプログラムから分かりつつある、リハビリテーションプログラムとして園芸活動がどのような特徴と有効性を持っているかを紹介します。

ガーデニングプログラムで行っている園芸活動は植物の栽培管理を主とし、植物を利用した工作的な作業も含みます。また、収穫物を調理して食べることもプログラムの中に取り入れています。園芸活動の主な作業となっている栽培管理作業は 1 つの作業でもやり方が複数あり、全体としては極めて多様な作業様式をとることができるため、ある程度は利用者ごとの特徴に即したプログラムを組むことができます。また、プログラムには施設の職員だけでなく、園芸学、工学、看護学を専門とする大学教員、園芸学、工学の大学院生、大学生が加わりました。

このような多様性に富むガーデニングプログラムを運営していくにあたり、我々はまず利用者の QOL について調査しました。その結果、心の健康は全体的に高いのですが、身体機能、日常役割機能（身体）、社会生活機能において個人差が大きいため、これらの点に配慮したプログラムを用意しなければならないことが分かりました。

ガーデニングプログラムを 1 年間行った後、利用者に生じた変化についてスタッフを集めてブレインストーミングを行い、抽出された要素を階層構造化モデル：Interpretive Structural Modeling（ISM）を用いて解析しました。その結果、プログラムが利用者の障害を自覚する機会を増やし、園芸への興味も伴って、細かい作業への集中力・注意力、遂行機能能力、対人関係能力の向上に影響する可能性と、これら効果の関連性を示すことができました。

【講義 1】　「Enriched environment（豊かな環境）」

山本 竜也　（①筑波大学大学院 感性認知脳科学　②産業技術総合研究所）

Enriched environment（豊かな環境）にはどのような効果があるのだろうか？
主にラットを用いたこれまでの研究報告について分かり易く概説する。
また、人間にとっての Enriched environment について、本講義を通して共に議論して行きたい。

【講義 2】　「半側空間無視の脳画像と神経症候」

大塚 裕之　（千葉大学大学院医学研究院　認知行動生理学）

本講義の目的は、半側空間無視(USN)の基礎知識を整理することである。
USN の神経症候と臨床所見を確認し、責任病巣とその背景に存在する神経機構について概観したい。

【講義 3】　「行為抑制障害の脳画像と神経症候」

戸坂 友也　（千葉県千葉リハビリテーションセンター）

行為とは意味を持った運動あるいは自らの意志で制御している運動である。
前頭葉内側面の損傷により行為遂行の抑制障害が見られる。行為抑制障害に関わる脳の働きについて脳画像と神経症候から概説する。